

エドゥアール・セガンーその誕生から前期青年期までー

川口幸宏

生誕の地クラムシー — パリと結ぶ薪材の筏

ニエヴル県クラムシーはパリから東南に約200キロのところに位置する地方都市であり、クラムシー郡の郡庁所在地である。クラムシーは、セガンの他に、東洋学者、画家、フランス革命期の政治家、大衆小説作家などの傑人を輩出している。ノーベル賞受賞者のロマン＝ロランもその一人である。彼の作品『コラ・ブルーニョン』(COLAS BREUGNON)はクラムシーを中心舞台として描いたものとして知られている。

現在こそパリとクラムシーとを直接結ぶ産業はこれとってないが、16世紀から19世紀の終わりにかけては密接な関係があった。両者を結びつけたのはペチカ等で使用する薪である。パリで消費する薪生産をほぼ独占していたクラムシーの奥地には、樅の木が豊かに生い茂るモルヴァンの森があり、この地方の主産業である薪材の生産と、パリへのその搬出のための豊かな河川を用意した。近代工業社会を支える陸上・水上交通機関が本格的に誕生するまでは、その薪材を搬出する唯一の手段であった筏がなければ、パリは厳しい冬を過ごすことが困難であった。

薪材で作られた筏はクラムシーからパリに向けて、ヨンヌ川・ニヴェルネ運河・セーヌ川などを航行する。16世紀中葉に発明された筏は独特である。

モルヴァンの森で切り取られた薪材はヨンヌ川の上流に流され、クラムシーでせき止められ、筏に組み立てられる。筏は、縦3m、横5m、高さ2mの大きさのものを1単位とし、9個連結した総長30mに及ぶ大きさである。これをトラン(列車)と呼ぶ。一度に大量の薪材を運搬する方法である。セーヌ川はその支流(ヨンヌ川など)を含めて全長775kmに及ぶが、その標高差はわずか470mしかない。このゆったりとした流れを利したトランの筏流しという運搬方法がクラムシーで編み出されたことで、パリのペチカの薪材をほぼ独占することになったわけである。このトランを運航するのが筏師である。クラムシーで筏師として働く者は、最盛期に400人以上いた。クラムシーの人口は当時5,000名ほどであった。筏を組み立てる作業はクラムシーを含めた近在地域の老若男女あがてのことである。

エドゥアール・セガンが 29 歳の時に発表したエッセイ「筏師たち¹」(1841 年)を次に紹介しよう。

あなた方、この世の幸せ者、すてきなパリっ子たちで、誰か、快適な暖炉を進んで悪く言うような者がいるだろうか？渦巻く炎を見つめて過ごす時、パチパチ爆ぜる陽気な火花を見入り、やがて勢いが弱った炎をかき集め、とうとう最後の火が尽きようとしてしまうころ、(まだまだ？もう最後？)炎に真顔で訊ねることの繰り返しをする。結局は残り火の移り気で愚かなご託宣を呼び起こすことができなくなる。あなた方のところに田舎の人々が大都市に高く売りつけるこの貴重な燃料を届ける人に、どうして(薪をもっと安く届けてくるように)言わなかったのだろうか？霧に包まれたロンドンがパリをうらやむように。あなた方は次のようなところや人を知っている。サンゴで赤くなった海岸、砂にダイヤモンドが埋まっている裕福な国、カシミアの谷間、あなた方の白てんで白くなった雪の北国、手袋が手にはめられあるいは使われずにしまわれているヴェニス、あなた方のすてきな足下のジュータンを拡げるシミルン人、あなた方の頭に彼らの無遠慮なヴェールを投げるマリーン人、ヴァランシアン人、ブリュッセル。でもあなた方は、こうした楽しみがどれ一つとして 1 年の 8 か月の間は存在しなくなってしまうような、ただ一つの物を生みだしているところについて、知っていない。身体を温めてくれる燃える暖炉を囲んで、素晴らしい部屋で私たちが集うことがないとしても、あなた方はジュータン、ダイヤモンドや白てんの装身具が必要だろうか？

この薪材は、トランに形が整えられ、筏師たちによって、モルヴァンの森から届く。このモルヴァン、このトラン、この筏師たち。疑いなく、最初はあなた方の耳に届くが、忘れられてしまう三つの言葉、あなた方が知らない産業、あなた方の幸せな生活にとって決して疲労を覚えさせない奇妙な存在。一年中、いつも未開拓なようなこのモルヴァンの森は、それほど、豊かであり、気楽に、横柄に小川に垂らしているたくさんのコナラの小枝の冠を強調している。森が木々に言うーこの冬パリは寒かろう。俺んでしまったこの都会をすこし暖めてやろう！ーそれからゆったりとした流れがその重い宝物を運び、あらかじめ準備しておいた水門にため込む。すべての伐採木がぎっしりと塊を作る。

どれだけ時間がかかろうとも、流れはクラムシーに届く。そこで、薪材は鉤で川から

¹ “LES FLOTTEURS”, *Le Prisme. Encyclopédie morale du dix neuvième siècle*. L. Cirmer, 1841, Paris. Pp.40-42...

引き出され、ヨンヌ川の両岸に、人一人通り抜ける隙間なく長く高く積み揃えられる。こうして並べられた薪材は、たいてい、クラムシー近辺のアルム村からプッソー村に至る川沿いに広がる地域を占拠する。そうなのだ、川に沿ってくねくねと曲がりくねったこの帯状の地帯が好都合なのである。間違いなく、戦時の隊列は、この帯状が動き回るので、とても面白い。しかしこの隊列は威厳があるのでもなく、大きくもなく、小さくもなく、計り知れないというほどのものでもない！いずれにせよ、有用性は大きく、劇は満員である。隊列が一つ消えると、別の隊列がそれに続く。勇気はあらゆる世代のものだ。しかし、暖炉がこの二つの薪材の壁を焼き尽くし、名もない川が涸れ流れを止めると、パリ、パリの隅々までが、指に息を吹き付けねばならない寒気に対して、他に替わるものがないのだ。だが、そのようなことになるなんて、心配しなくてよい！筏師たち、彼ら疲れを知らない水夫たち、建築家でもあり建造者でもありパイロットでもある彼らが、私たちのために、骨の折れる職能を引き続けてくれる。

3月の雨のころ、川の水かさが増し始めると、周辺の地域から、多数の人々、その妻、その子どもたちが集まる。すべての人が入り交じる。力強い若者が積み重ねられた薪材を揺さぶる。薪材は崩れるが、ほとんど事故はない。それから乙女たちが一輪車を近づけ、子どもたちがそれに薪を積み込む。老人たちはこの薪を集め15ピエ(5メートル弱)の長い棒で支える。若者がカードル(杵)の中に薪を入れる。力強くハンマーで打ち込む。このトランのうちの一つをブラーンシュと呼ぶ。4つのブラーンシュが四角に結びあわせられ一つのクーポンを形づくる。18のクーポンが一つのトランとなる。これらの労働のすべてが川岸で遂げられ、どのブラーンシュも川に運び込まれた時、つまりすべてができあがって、ブラーンシュは、それぞれの間をルエ(直径1プス(3センチ弱)長さ15から20ピエの棒で、柳の枝のようにしなやかに曲がるように加工されている)で縛り付けられ、一番近くの運河水門が開けられた時にいつでも出発できるよう、トランを作る。

どのトランにも二人が乗りこむ。助手は子どもである。働きぶりから借りて、ブート・ダルジュ(見張り役)の名がある。彼はトランの最後尾を操縦する。親方の筏師は先頭を務める。彼は突発的な出来事の場合にしかその場を離れない。奔放な腕前で、彼は、船首で、向かい風を受け、頭には何も被らず、髪を風にたなびかせ、腕を突き立てる。厚織りリンネルのズボン、青いサージのベルト、赤いシャツ、大きな短靴が筏師の習わしとなっている衣装である。それでこそ、腕を絶えず動かし、脚をしっかりと固定させ

て、必要に応じて右に左に突き進む準備ができているのだ。彼は、祖先が用心深く慎重に川に架けた、ひっそりと佇む古い橋の、暗く、狭く、偏円のアーチをくぐり、堰を乗り越えなければならない。水流が運ぶトランは、深い堰の底に頭から突っ込んでしまい、壊れるかもしれないし横転するかもしれないのだ！安心せよ、筏師親方は両の手を頑丈な棒で操作し、棒を水底の砂に差し込み、流れを操る。それから棒の反対側の先端を、トランの先頭にしっかりと結びつけられた二つのオレイユ（耳）の一つに差し込む。流れは絶えず筏に襲いかかる。しかし、そのぞっとするような流れは続かず、薪材の長い蛇はその身体を持ち直し、大抵、その驚くほどの高さの姿を取り戻す。この操縦は大変な熟練を要する。人と筏の不安定な小舟とは 30 ピエ隔てられている。泡立つ水がとどろき、大きく拡がり、そして集まる。しかし必要な傾斜は十分にある。トランの先頭が狭い通路に入っていく。遙か後ろの、トランのしんがり推進力を保っていないならば、アーチをくぐり抜けるとき、次のような簡単な命令が聞こえてくる。—ブート・ダルジュ、ムーン・フーム！（見張り番、わが弟子！）—それでブート・ダルジュは彼の背丈と同じほどの長さの棒を握り、砂利に突き込む。子どものこうした努力によって大きな塊の泡立つ水の勢いが弱まる。これからは、彼らが危険を乗り越え、筏師とその助手が、狭く曲がりくねった、時には深く時には浅く、進むには十分な水量の水路に従って、棒をあっちこっちへと幾度も差し込みながら、進んでいくのが見える。道のりは長い。しかもヨヌ川は不規則な川である。筏師たちは、船乗りのように、障害物や暗礁を示す地図を持たない。にもかかわらず、長い経験のおかげで、彼らはどんな障害も知っているし、砂のどんな堆積にも彼らはなじんでいる。運航するために、そしてうまく操縦しなければならないために、8 日から 9 日を要する 100 里の道のりには、逃げなければならないこと、あれこれ試さなければならないことのあることが彼らは分かっている。トランは、進み、浮かび、その船体を長く伸ばし、蛇行し、急ぐ。これらの動きはすべて筏師によって跡が残され、あるいは戦われる。今、その船首が水に突っ込む。するとベルトまで筏師は引きずり込まれる。それから船首が起きあがる。そして、息切れしたように、トランは止まるのを望んでいるかのようである。これは水の流れで推進されるこの長い機械のあいだの果てしない戦いである。そして曲がったトランの機嫌をとる用心深い筏師は薪材のこの長いリボンの角を守る。それは川の厳しく狭く切り立った兩岸をうまくすり抜けるために他ならない。時には水は数プスの深さしかないところもある。すると、水がない我が親方は 3、8 あるいは 9 日間、砂で動けなくなる。つまり、彼

は座州してしまうのである。

政治家や商人・教育者ではなく、筏師という職人がパリの文化をクラムシーに持ち込む。おそらく鋭敏な生活感覚で文化が選り取られたであろう。だから、その生活感覚にそぐわない場合には勇猛果敢に抵抗の姿勢を見せたのである。例えば、フランス革命期の度量衡の変更に対してはそれに反対して大暴動が起こったし、ルイ・ナポレオン（ナポレオン III 世）による 1851 年のクーデターの際にはそれに反発したクラムシーの住民が 2 日間にわたって市庁舎を占拠した。クラムシーだけで約 600 人も有罪刑を出したこの事件（2 名が処刑されたほか、多くが流刑）はクラムシーがいかに中央の動静に敏感であるかを物語っている。これらの「暴動」の中心にあったのが筏師たちであった。

クラムシーはまた、国家の要請を受けて、パリの児童養護施設に収容された捨て子・浮浪児等の里親の街でもあった。フランス革命以降じわじわと、あるいは急速に、進められたさまざまな近代化は、クラムシーの「筏」や「委託里親」の姿を消し去ってしまう役割を果たした。しかし、クラムシーの原風景は今もなお豊かに残っている。

セガン家のこと

エドゥアール・セガンの葬儀の際（1880 年 10 月 28 日死去、同年 10 月 31 日葬儀）、彼の友人 L. P. ブロケット博士が彼の家系について次のように語っている²。

「エドワード・セガン医学博士は 1812 年 1 月 20 日にフランス、ニエヴル県のクラムシーで生まれました。彼は優秀な家系の生まれであり先祖は数世代にわたって医師として名を挙げ、その地域ではその道の最高位を占めておりました。」

ブロケットが弔辞で述べたセガン家の家系についての見解はほぼ我が国におけるセガン研究でも踏襲されてきている。

以下、このことについての検証をすることにする。

² 清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』（全 4 巻）、第 4 巻『資料編』、日本図書センター、2004 年、104 頁。



エドゥアール・セガンの父祖はもともとクラムシーの人ではない。クラムシーはヨンヌ県に隣接しニエヴル県の北端に位置している。父ジャック＝オネジム・セガンはクラムシーからヨンヌ川を 8km 下ったヨンヌ県クーランジュ・シュール・ヨンヌという人口 700 人ほどの寒村に生まれ育った。ジャックの父すなわちエドゥアールの祖父フランソア・セガンは、18 世紀後半期、薪材商の一人であった。彼がどれほどの資産を持ち、どれほどの薪材を扱ったのかは不明である。しかし、当時、薪材商一般は「コック・ドゥ・ヴィラージュ（村一番の持て男）」階層であったといわれている。事実、祖父は、フランス革命前、クーランジュの三役を務めている。ジャックは、そのフランソア・セガンとマリー・テレーズ・ギマル夫妻の間の末っ子、第 11 子として、1781 年 2 月 16 日に生まれた³。

フランス社会の伝統に「名付け親」風習がある。「代親」ともいう。「父」と「母」の両方が揃っている。「代親」が一般的に、子育てに実質どの程度の役割を果たしたのかは未調査であるが、ジャックの「代親」とりわけ「代父」はその生涯に大きな影響を与えている。

「代父」はドゥニ・ウドム・ベルトランという外科医であった。ベルトランはクーランジュからヨンヌ川を西に離れて 10km ほどのところにあるヨンヌ県ドリュエール＝ベル＝フォンテーヌというきわめて小さな集落に居住していた。この集落には廃墟となった中世の城があり人々は 17 世紀に建築された家に住んでいた。村の辺にはこんこんと湧き出でる泉があり、かつては水車を動かす水源として役割を果たしていた。ジャックは、この村で、すなわちベルトランのもとで一時期生活をしていただようである。そしてこの外科医から人生の職業選択に関わる大きな影響を受けた。すなわち、長じて、パリの医学校に進み、医学博士となったのである。

³ “Act de Baptême du dernier enfant de François SEGUIN”, ARCHIVES départementales D’Auxerre, Série 2E 119, 3 BM3, 1766-1785, Coulanges-sur-Yonne

論文や著書に習わしの献辞を、ジャックが、医学博士論文⁴の扉で、次のように、ベルトランに捧げている。

「我が親、我が師、我が一番の友、ドリュエの外科医 E. D. ベルトラン氏へ。我が感謝の証として。あなたの生徒の学業の最初の果実に好意的な眼差しを向けられんことを。それはあなたの生徒に対して幸運と勇気の源となるであろう。」

彼の医学博士論文（わずか9ページ！）は「第三脊髄－胃腸熱に関する研究－胆汁の多い第三熱」とタイトルされたものであった。医学史では後年「マラリア熱」と呼ばれる症状の研究である。彼がこのタイトルを選んだのは他にもない。クラムシー近辺の住民の間で蔓延していた厄危＝風土病であったからである。数多くの「溜め池」、ゆったりと流れる河川は筏流しという産業風物詩を生み出したが、その一方で、水中で病原の絶好の繁殖を促してもいたわけである。「第三脊髄－胃腸熱」が水中の病原によるものであることにジャックが気付くにはまだ時代が早すぎたが、祖父の薪材商の仕事を通して見る人々の死の苦しみに自らの生涯をなげうちたいという気概、すなわち風土病との戦いへの熱意こそが、彼に医学への道を歩ませたとも言えるだろう。博士論文の緒言で彼は次のように言う。

「脊髄＝胃腸熱がしばしば扱われてきた。この病気は私が医学を研究するようになった地方での、そして私が医業を開く心づもりを持った地方の近くでの風土病であるが故にこそ、私は自分の問題として検討した・・・」

この学位論文は、革命暦13年フロリアル7日(1805年)にパリ医学校に提出され報告・審査された論文であった。審査委員会リストの筆頭にはピネルという名があるが⁵、「狂人を鎖から解きはなつた」という伝説の主フィリップ・ピネルである。ジャックが医学生時代に出会い、友好を交わした二人の人物は、後年、ジャックの息子エドゥアールがパリで白痴〔知的障害〕の教育の道に入るきっかけを作り、あるいは手ほどきをした人である。前者はL. B. ゲルサンといいジャックの4年ほど先輩にあたり、同じ医学分野（内科）を専攻している。彼はパリの病弱児施療院長を務めた。後者は『アヴェロンの野生児』で知られるJ. -M. -G. イタールである。ジャックの研修医時代の指導医師の一人がイタールであった。

論文審査に合格した後、ジャックは陸軍病院で研修医としての3年間の任務を終え、クラムシーに医師として赴く。1808年10月29日のことである。生まれ故郷のクーランジュ

⁴ “DISSERTATION SUR LA FIEVRE MENINGO-GASTRIQUE TIECE (Fièvre tierce bilieuse)”, Numero 451.

⁵ 審査試験官リストはフルネームで記載されていない。ピネルの他にシューの名が私には目に付いた。シューは、文学者として初めて知的障害者を描いたウージェーヌ・シューの父親である。

ではなく、近在とはいえ隣県のクラムシーを彼の医療の地として選んだわけは明らかではない。可能性として考えられる一つの要素は、彼がクラムシー入りをした時は、父親のフランソア・セガンが他界してまもなくであることと関わっている、ということである。セガン家の資産では取得年月日が空欄の土地・家屋資産がかなり多くある。これらが父親の遺産分けによって得たものではないかと考えられるわけである。18世紀から19世紀にかけて国有地・山林がブルジョアジーによって多く購入されている。つまり、商人が地主になった時代背景がある。フランソア・セガンも筏商人として得た資金を元に有償で払い下げられた国有地・山林を取得した可能性がないわけではない。この可能性を考慮に入れなければ、ほとんど地縁血縁のないクラムシーに医師として赴任し、総計60ヘクタールもの土地を取得することは困難なはずである。

いずれにしても地域住民が冒され次々と命を失っていく風土病との医療の闘いを固く胸に秘めていたことであろう。彼は犯罪人や貧民などが収容された施療院の医師を勤めた。さらには不慮の事故で死亡した者、行き倒れなどの検死も引き受けることがあった。時には、今も残るセガン家の邸宅に大きな馬車用出入り口（馬車門）があることが示しているが、遠方にまで診察・治療に出かけることもあった。彼の医療活動で記録に残っているのは、ニヴェルネ運河のクラムシー水門のところで発見された死体の検視報告書、コレラの来襲に備えて罪の軽微な者の一時釈放を訴える監獄医としての嘆願書などである。

薪材商と並んで「村一番の持て男」となったジャックは、1811年4月29日、ヨンヌ県オーセールの子生商人ジョセフ・ウザンヌと妻マリー・アニエ・ペロニエとの娘マルグリット・ウザンヌと結婚した。マルグリットは1793年9月15日生まれであったというから、新郎30歳、新婦17歳である。なお、県立オーセール古文書館に保管されている二人の結婚証明書⁶では、ジャックの両親すなわちエドゥアール・セガンの父方の祖父母はともに亡き人となっている。

結婚の翌年1812年1月20日に第1子が誕生した。子どもの名前はエドゥアール・オネジム・セガン、すなわち本稿の主人公である。

なお、セガンの父祖の出生の地すなわち18世紀のクーランジュには「セガン」家が数戸あったことが判明した。一方、同時期同地における医師に「セガン」と名の付く家系は見あたらない。エドゥアール・セガンの祖父がどのような経緯で薪材商となったのかについて

⁶ “Act de mariage de Jacque Onésime SEGUIN et Marguerite UZANNE.”, Archives départementales d’Auxerre, Série 2 E, NMD 1881, Auxerre.

てはまったく不明である。

エドゥアール・セガンは自身の家族についてほとんど語っていない。母方の祖父母のことも母親のことも一切記録に載せていない。父方の祖父母とは当然のことながら実体験を持ってはいない。だがその祖父はクラムシー一帯の主産業に携わる商人であったわけである。セガンは、クラムシーの薪材による筏製作と筏流しについては誇り高く綴っているのだから、何らかの言及があってもよいのではないかと思うのは、後の世の者の無いものねだりなのだろうか？家族観は数多くあるセガンの「謎」の最大と言ってよい。

オネジム＝エドゥアール・セガン⁷の誕生

「1812年1月22日午前11時、小職ことコミューン長テネール・デュラック氏によって権限を委嘱されたクラムシーの副戸籍責任者ジャン・バプティスト・ピエール・フランソア・サロのところに、旧クラムシーのオ・バー・プティ・マルシェ通りに居住する医学博士ジャック・オネジム・セガン氏31歳が出頭した。その時小職は、申告者自身とその妻マルグリット・ウザンヌ夫人との間に今夜8時に生まれた男児を見せられた。氏はその子にオネジム＝エドゥアールとのファースト・ネームをつけると告げた。当該の届出は、ともに旧クラムシーに居住する間接税収税吏ジャック・セガン・ブウヴェ⁸氏36歳と医学博士ガブリエ・ピエール・サレ氏67歳の立会いのもとでなされ、小職が本証明書を彼らに読会した後、父親、立会人、小職とが署名した⁹。」

1779年8月26日の「人間及び市民の権利宣言」は「アンシャン・レジームの死亡証書」を意味したが、確かにフランスは国家＝国民社会建設を急速に進めていった。行政制度もそのひとつであり、旧来の州や特権的な地域が廃され、国土は県に再編された。県は、郡、小郡（カントン）、コミューン¹⁰と下位区分された。「クラムシー」と称する行政体はニエ

⁷ 知的障害教育の開拓者セガンは、一般的に、エドゥアール・セガン（フランス名）、アドワード・セガン（アメリカ名）と称されている。この出生届の名はこれまでの研究史では使われることが無かった。同時に、セガン本人もこのフルネームで署名をしてはいない。そうして事情を考えて、本稿では、場合においては「エドゥアール」と記述することとするほかは、エドゥアール・セガンとする。

⁸ ジャック＝オネジム・セガンの兄。すなわちエドゥアールの叔父である。「間接税」は、相次ぐ戦争によって窮乏した国家財政を改善するためにナポレオン第一帝政下で導入された。徴税の効率化を図るために設けられた官職が収税吏である。

⁹ “Acte de naissance de Onésime Edouard SEGUIN”, Archives départementales de Nevers, Série IV E, NMD 1811-1812, Clamecy, N° 11.

¹⁰ コミューンに「市町村」という訳をあてる史書が多いがそれは、わが国のように「市」あるいは「町」「村」と区分できる行政概念ではない。また、「市」を意味するヴィル、「村」を意味

ヴル県の、ひとつの郡であり、ひとつの小郡であり、ひとつのコミューンである。各コミューンは、アンシャン・レジーム期まで小教区教会によってなされていた戸籍管理・教化啓蒙・文化福祉など、住民の生活に直結する事柄を引き継いだ。戸籍管理はコミューン長の任務であった。先の出生証明書に「コミューン長・・・によって権限を委嘱された」とわざわざ断り書きが入っているのは、そのためである。なお、戸籍管理についてはスムーズに移行されたが、教育や福祉については、必ずしもそうではない。このことについてはセガンの活動の具体に即して、いずれ詳しく触れることになる。

クラムシー・コミューンは、ブヴロン川とヨンヌ川の合流地点すなわち二つの川に挟まれた小高い丘の上に中世期に作られたサン＝マルタン教会を中心とし、かつては城壁を持っていた旧村（旧クラムシー）と、二つの川を越えた郊外（ファブール・クラムシー）とで構成されている。ロマン＝ロランの生家はブヴロン川沿いで旧クラムシーにある。彼は窓から川向こうに広がる畑を毎日眺めていたことであろう。一方われらが主人公エドゥアールの生家は旧村のほぼ中心に位置し、入り組んだ村中の小道に面していた。馬車 1 台がかろうじて通行できるほどである。村のシンボルであるサン＝マルタン教会の塔のある広場から村の主要な道が出ているが、その一本がグラン・マルシェ通りであり、そこから坂を下るように出ているのが、オ・バー・プティ・マルシェ通り（「小市を下がった通り」の意）である。この通りをはさんで斜め前にクラムシーが誇る大衆小説作家クロード・ティリエの生家がある。現在の通り名はクロード・ティリエ通りとなっている。エドゥアールは、「青年期に、小麦やオート麦が 7 種類の桁で量られ、売られるのを見ていた」と、最晩年に著した『教育に関する報告』（1873 年初版、1880 年第 2 版）に記述している¹¹。プティ・マルシェでは麦の市が立っていた。セガンはそれを眺めて育ったわけである。

さて、同書には幼少期の回想が述べられている。

「楽しみに物を作るということは、ずっと昔から、家族で大きな位置を占めてきたはずである。ただ『エミール』がそれを流行にしたということだ。かの本の影響のもとで、母親たちは、いや特に父親たちは、もし私の幼少期の記憶が正しければ、日常の教育にエミール流のやり方を持ち込み、子どもたちが楽しみにものを作るにふさわしいように

するヴィラージュとも異なる概念である。コミューンは、わが国で言う「市」「町」「村」が中央行政から見れば末端の自治体であるというのと同じだと考えればいい。

¹¹ ここで言う「青年期」とは 10 代の前半期のことであろう。彼は、ヨンヌ県オーセールで母方祖母の家に寄宿し、その後コレージュで寄宿舎生活を送り、そのままパリに出て行き、二度とクラムシーで住むことはなかった。コレージュ生活では長期のヴァカンスなどを利用して、クラムシーの生家に帰っていたと考えられる。

と、熱心であった。私たち、小さなブルゴーニュ人は、パパの手の動作が壁に、オオカミ、ノウサギあるいは椅子に座っている大工を表象する影絵を作ってくれた時、それをまねしようとしたものである。私たちは、パパに倣って、揺れる塔をドミノ牌で作ったり、我が戦士たちのテントをカードで張ったりしたものである。紙を簡単に折りたたんで、ひよこ、(ココ)、家、ノアの箱舟、実在しないような小型船舶の艦隊を作った。また、はさみを使って紙から、財布、はしご、壁掛け、ひだ飾り、王冠を作った。やがて、アンズやサクランボの種を加工し、ハート型、籠状のもの、数珠に形作るようになった。ドングリやマロニエで摩訶不思議な形のものを作ったものである。自然のまさにその幼稚園の先生は、春には、私たちに、柳の木の幹から樹皮を剥がし、音を刻み、フルートのように奏でて、音を出す方法を示してくれた。あるいは夏には、帰り道に、高く緑に生い茂ったライ麦の茎を抜き取り、道端の頭上のサンザシを大きさに応じて剥ぎ取り、まるで鳥のさえずりのようにさまざまな音曲を演奏してくれた。家に帰ると、再び、私たちに手先の使い方を示してくれようとした。それには、子どもが理解できるように、たいていは仕掛けがしてあり、樽のタガをさらに強く締めるようにタガを緩めてあったり、できるだけもとのいい形に綴じなおすために教科書は表紙が引き剥がされていたりというもので、手先の熟練の発達のために欠くことのできないものであった。」

クラムシーと『エミール』との関係の程度について検証することにしよう。

『エミール』は革命後のフランス社会に、とりわけ一部の政治家（例えばロベスピエール、ナポレオンI世など）や貴族・ブルジョアたちに大きな影響を与えた。それらは、妻が家庭に、夫が社会に、という一夫一婦制近代家族形態を誕生させた。しかしながらクラムシーは階層差が激しく、一般にはきわめて貧困者の多い地域であった。従って総じてまだまだ識字率の低い地域であり、識字者と言っても簡単な読み書きができる程度の者が大きな割合を占めていたから、クラムシーで『エミール』が一般に読まれていたとは考えられない。ただしクラムシーでは1770年代に最初の書店が開業しているから、同書が「店頭に並ぶ本」（この時代の書店は、基本的に予約注文制であったと、クラムシー学芸協会の調査にはある）の中に加えられていたことは大いにあり得るわけである。読者対象はジャック＝オネジム・セガンのような知識・文化人、彼らと晩餐会を催す階層（例えば薪材商）などであっただろう。このように考えると、セガンの回想にある「父親たち」「母親たち」というのはクラムシーにおける特権階級の人々を意味していると考えられる。

セガンが回想する幼児期は1810年代のことと考えてよい。クラムシーにおけるこの年代

の幼児教育・保育の事情を語る統計資料、記録史料、回想記などの類は、現在のところ、セガンのこの回想録以外には見当たらない。しかしながら、セガンの「回想」にもかかわらず、圧倒的多数の民衆にとって幼い子どもの保育は、「幼稚園の先生」よろしく父母が行うほどの余裕も才覚も生まれなかったであろう。では、どのようにして、子どもたちは幼児期を過ごしたのであろうか。

家族労働の現場に置かれていたのである。ルソーが『エミール』で描いているように、子どもの動きを拘束することでそれは可能であった。ルソーはそれを否定すべきこととしているが、多くの民衆にとっては否定すれば我が子を育てられないのである。子どもたちは、初めは拘束されやがて労働への参加をなすようになる。拘束から解放されて労働参加をするようになると、親たちの労働技術を「真似び」ながら技術を習熟する。筏製作に繁忙な季節にも同じような光景が見られたはずである。6歳ぐらいになると、大人に混じって、薪材を手に抱えて運ぶ姿が見られる。

En Morvan — LE CHATELET — Le flottage des bois sous l'Étang de l'Yonne



セガンの幼児期はこうした農村における子育てが常態であったろう。それを『エミール』流の教育と呼ぶには少々、の検討を要する課題である。だが、『エミール』と農村を含む第一次産業社会における習俗的子育てとの内的関連につ

いては、検討に値する興味深い課題であると思う。

この時代、クラムシーには保育所、幼稚園はなかったと考えられる。というのは、フランスに幼稚園が作られたのは1826年のことであり、19世紀初めにイギリスで創設されたものをモデルとして慈善事業をする上流婦人の協会によって作られたと史書に示されており¹²、また、クラムシーを含むブルゴーニュ地方では、1837年当時で、ヨンヌ県でただ1校の保育園(あるいは幼稚園)がオーセールに私立で作られているのみであったという¹³。これらに示されている幼稚園は前記の農村の子育てや『エミール』とは質がまったく異なり

¹² A.-F. Thery, *Histoire de l'éducation en France*(A.-F. テリィ『フランスにおける教育の歴史』1858年)、より。

¹³“Annuaire historique du département de l'Yonne 1837”, Auxerre. 1837.

「子どもたちが走り回っても危険のないようにし、秩序や規律の習慣を身につけさせ、子どもたちにその年齢に理解できる知識を教えることのできる器官能力を発達させ、初等学校の学習の準備をなす」のであり、貴族・ブルジョア階級に多く見られた(つまりは非『エミール』的な)家庭保育・教育の方法と内容を継承しているものであった。

これらのことを考えあわせると、セガンが受けたと回想する幼児期の家庭教育は、時代社会的に言えば、やはり特異なものであったといわなければならない。そして、それをセガンが19世紀後半における保育・幼児教育のあるべき姿のコアとしていることは注目すべきであろう。

さて、幼児期を過ぎて、学齢期に入ったセガンは、どのように過ごしたのであるか。初等教育に関する経験を彼は何ひとつ書き残していない。この時期に関する回想は先に紹介した市の光景だけである。

1816年2月、初等教育のための学校を各コミューンに1校ずつ設置することが勅令された。貧窮者を無償とするものの義務教育ではなかった。このためクラムシーでも公立小学校が設置されている。そのほかに修道士など宗教関係者による初等教育機関が3校開設されていた。しかしこれらはセガン家のような特権階級には無用のものであった。というのは、この時期のフランス社会は階級差が強く残存しており、特権階級が望む教育とフランス社会の近代化を推進するための大衆教育とは内容も質も異なるものであったからである。1816年の初等教育に関する勅令は、後者すなわち大衆教育を通じて生産の向上、軍事力の増強などを図るものにしか過ぎず、特権階級の主たる要求である社会の上部構造への参加のための専門性や教養を修得することに応えるものではなかった。セガンには弟と妹とがいるが、弟は医学博士となり、妹は公証人と結婚している。まさしく富裕層や特権階級に開かれていた将来を、セガンきょうだいは選択している。このことから見ても、セガンは、大衆教育としての初等教育機関で学ぶことはなかったと断言してよい。

民衆の子どもたちは、多くが6歳から7歳になると、労働に参加していた。セガンが「筏師たち」で次のように描写している。

「3月上旬の頃、川が増水し始めると、周辺の地域から、多数の人々が、妻や子どもたちを引き連れ川岸に大勢集まってくる。・・・娘たちが一輪車を近づけ、子どもたちがそれに薪を積み込む。」

さらに、若者が束ねられた薪を木枠の中にはめ込み、ハンマーで打ちたたきしっかりと固定する作業光景、子どもが筏に乗り込み運航時の「見張り役」をする光景をも、セガンは

描いている。こうした子どもたちと学業との関係を直接示す史料に出会っていないが、セガンとほぼ同世代のマルタン・ナドの回想は大いに参考になる。彼は次のように綴っている。

「わたしは毎朝、牝羊を家畜小屋に連れ戻してから、ポンタリオンに出かけた。せいぜいのところ二時間、教会委員のところで過ごし、夕方は畑仕事に戻るという具合であった。収穫期の数ヶ月の間は、野良仕事にかかりきりにさせられた。その年はアルファベットを覚えることと、音綴の初歩を覚えることで過ごした。」(マルタン・ナド著喜安朗訳『ある出稼ぎ石工の回想』岩波書店)

富裕層や特権階級の子どもたちはパンシオン、コレージュなどの寄宿制中等教育機関で学んだ。幼いうちはそれらに付設されている初等科で学ぶものもいる。中等教育機関以外の学習手段としては家庭教師による個別教授が一般的である。クラムシーにはアンシャン・レジーム期の軍事コレージュを1810年代に公立コレージュとして組織改編した中等教育機関が1校あった。しかし、セガンがその初等科で学んだという足跡を見ることはできない。

彼が組織的教育機関すなわち学校で学ぶようになるのは13歳以降である。

学びの軌跡—コレージュ時代

(1) オーセール王立コレージュ時代

エドゥアール・セガンは思春期に入った。村の大抵の同世代の子どもたちは「一人前の労働者」面して朝早くから陽が沈むまで身体に汗にしている¹⁴。しかし彼は、社会の上部構造に入るべき宿命を背負っていた。中等教育機関に進み、その準備を開始する。

彼が選んだ中等教育機関(コレージュ)は、地元クラムシーのそれでもなく、ニエヴル県の県都ヌヴェールのそれでもなく、クラムシーから北へ45km行ったところのヨンヌ県の県都オーセールのコレージュであった。オーセールはパリへの薪材のトランの通過する

¹⁴ 児童労働に一定の制限を設けるようになったのは、本稿記述対象の年代よりかなり後年の、1841年3月21日の「子どもの労働に関する法律」である。まず、7歳以下の労働を禁止している。8歳から12歳まで8時間、12歳から16歳まで12時間(いずれも一日あたり)の労働時間が定められ、13歳以下の夜9時から朝5時までの夜間労働は禁止された。しかし、この法律における児童労働の主たる対象は、大規模機械工場における労働である。徒弟制の伝統的な技術職やクラムシーの筏作りのような地場産業の労働についてはほとんど意味を持たなかったと言ってよい。

ところであるが、セガンの母の生地でもある。

セガンは自身の学校経験をほとんど綴っていないが、オーセールのコレージュについてはささやかな記述を見出すことができる。デュッセルドルフ近郊にあるグラッドバッハ学校の訪問記に、「校庭は美しく、校舎は修道院の様相を示している」その学校は、「アミオによって建築されたオーセールの我が旧コレージュのようだ」と綴っている¹⁵。

1881年当時の記録であるが、オーセールは人口20,000人強でありクラムシーのほぼ4倍の規模の都市である。中世期に大変栄えた都市であり、とりわけサン＝ジェルマン大修道院では、9世紀から、教師と共に寄宿生活を送る学生がヨーロッパ中から集まってきたという。その数2,000人を超えることがあったというから非常に規模の大きいコレージュである。やがてジャック・アミオによって大修道院のすぐ側に校舎が建築され（16世紀）、コレージュは大学準備課程も置くようになり、一時期は、軍事コレージュに組織転換された。

1803年、ナポレオン政府は全国の主要な都市に対し、中等教育学校（リセ）をそれぞれ1校ずつ開設するよう布告した。それを受けて1804年、オーセール市長はヨンヌ県知事に宛てて、「中等教育学校の設立は我が市の大きな関心事であります」と請願を行っている。それに対し「公教育監督管理の責を負う国家委員会」よりオーセール市長宛に、「中等教育学校設立のために貴市の旧コレージュの校舎を転用すること」との応答がなされた。こうしてオーセールにリセ開設の道が拓かれた。リセの設置は1812年のことである。だが復古王政期にリセは王立コレージュへと組織を編成しなおす。

セガンが在籍したのはこの王立コレージュではなく、古き伝統を誇るジャック・アミオ校である。現在は、男子のコレージュ（中学校）とリセ（高等学校）とを併設している公立校である。オーセール旧市街、サン＝ジェルマン大修道院のすぐ前に位置する。

コレージュ、ジャック・アミオは、屋根裏部屋付き二階建て（日本風にいえば屋根裏部屋の階を含めて4階建て）。正門から左右に並ぶ棟とフランス庭園の中庭を挟んで正面玄関（父母面会用玄関）棟があるが、この棟も教室棟である。正面玄関棟の裏手には軍事教練用の運動場が設置されていた。セガンの在籍中は、初等科学級を含め全校生徒数140名がラテン語、哲学、歴史、物理学、数学、レトリック、自然史、フランス語を学んでいた。とりわけ、歴史は特別授業が組み込まれ、物理学は専用の教室を備えていた。管理者・教育者は、「校長」、「施設付き司祭」、「哲学及び歴史の教授」、「物理学及び数学の教授」、「レトリック（第6課程まで）の各教授」、「初等科学級2分野の各教授」である。生徒たちは

¹⁵ 『教育に関する報告』前出

朝 6 時起床夜 9 時就寝の生活習慣を厳格に守ることが求められた。授業は朝 8 時開始、昼休み 2 時間、夕刻 5 時終業。夕刻 7 時までが夕食とシャワー。以降 9 時少し前までが「自習室」にて学習。自習室では自習補助教師が厳しい目を光らせていた。さらに管理・教育陣に「施設付き司祭」が加わっていることから自明なように、学校内にカトリックに基づく宗教施設・設備が整えられ、宗教者が宗教教育を行っていた。

セガンがオーセールのコレージュに入学したのは 1825 年のことである。附設のパンシオン（寄宿舎）で寄宿生活を送った。寄宿料は年額 400 フラン、そのほかに教授への報酬として年額 20 フランを支払っている¹⁶。ちなみに、1830 年以降の立憲王政時代の経済状況との比較でしかないが、「労働者の年収はよくて 750 フランであった」（『世界歴史体系・フランス史 2』柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編、山川出版社、1996 年）から、かなりの高負担である。

この時代のセガンを公的史料に基づいて再現したが、あと一点、非常に重要な「記録」を無視し得ないことがらがある。それは、セガンが著書（1846 年著書）にある、「祖母の家に自室を持っていたが、父親に取り上げられた」という記述である。家族関係調査の結果、この「祖母」とは母方のそれであり、セガンは、近世から近代初頭にかけてフランス社会のほぼ一般風習であった、幼児期から少年期には両親の手から離れて育てられる「乳母」「里親」システムによって生育しているが、「祖母」とはその「里親」であった。オーセールの中心街に「祖母」の家はあったことが判明している。このことを加味して、公的史料を読む必要があるだろう。

ジャック・アミヨ校は言うまでもなく 24 時間寄宿が大原則である。だとすれば、1825 年同校入学以降寄宿生活をし、次項で述べるパリの特級コレージュ、サン＝ルイ校の後期課程（グラン・ゼコール進学クラス）に 1928 年に進んだのだろう。週末に帰宅が許されるというシステムもあったからそれを利用したり、長期バカンスの折にはやはり帰宅が許されたからそれを使用したりして、「祖母」の家で生活したことが考えられる。当然、クラムシーの生家に帰ることもあったろうことは、先に述べた「麦の市」を眺めたという経験もあったわけである。

（2）サン＝ルイ王立コレージュ時代

オーセールのコレージュに在籍していた足跡をセガンが残していることは先に触れたと

¹⁶ Archives Nationales AJ 16 114.

おりである。その後の学歴に関しては彼自身の筆でまったく触れられていない。しかし、国立古文書館に保存されている一編の記録が彼の同校での在籍を明かしてくれる。

「サン＝ルイ王立コレッジ 受賞者一覧」の「1829年8月18日の記録」として次のようにある¹⁷。

「数学特別進学クラス第1年次

ゴダン氏、教授

第4次席賞 セガン(エドゥアール)

クラムシー生まれ

ヴァンサン氏のアンスティテュション」

この文書によって、我々は、エドゥアール・セガンが1828年にパリに上り、サン＝ルイ王立特急コレッジの数学特別進学クラス(マテマティック・プレパトアール)に入学したことを知ることができる。特別進学クラスというのは、ナポレオンの教育改革によって制度化された各種グラン・ゼコール(高等専門学校)への進学のためのクラスである。通常のコレッジを修了した者に準備されているコースだから、セガンは、オーセールのコレッジを無事終了しているわけである。また、特別進学クラスに進めば、たとえこのクラスでの学習を停止したとしても、大学(ファキュリテ)進学のためのバカロレア資格を取得していなくとも、大学で修学することができる。

ナポレオンI世は中等教育機関以上の改革に力を入れ、リセを設置し、高等教育機関として法学・医学を中心としたファキュリテ(学部。今日でいう単科大学)の設置のほか、行政・技術・軍事などの分野の超エリートを養成する各種のグラン・ゼコールを設置した。ファキュリテへの進学にはバカロレア(大学入学資格)を得ることを条件とした。このナポレオンの教育改革は、現代のフランスの教育制度に継承されている。

グラン・ゼコールの予科の意味を持つ準備クラスは、地方公立コレッジにはなく、王立コレッジの中でも特権的な地位を持つものであった。パリで言えば、サン＝ルイを含めて5校を数えるに過ぎない。数学クラスは各種のグラン・ゼコールの中でもエリート中のエリートが集まり養成されるエコール・ポリテクニクへの進学を準備するものであった。このことから考えれば、セガンは、少なくともこの時点において、自らの人生行路をフランス社会の支配層という社会構造に入ることを描いていた、ということができるであ

¹⁷ Archives Nationales AJ 16 94

ろう。それがセガン自身の意思であったのか、それとも父親のジャックの強い要請があったのかは不明である。

なお「受賞者一覧」の末尾にある「ヴァンサン氏のアンステイテュション」とは、共同生活を送りながら教育を受けるサン＝ルイ校の母胎の一つである。「ヴァンサン氏」がどのような人で、その施設がどこにあったのかは調査未了である。

セガンの「第一の誕生」期はここで幕が下ろされる。